

魚目の一句・主宰の一句

馬もまた齒より衰ふ雪へ雪

魚目

五十年経ちて明かされ初笑

夕紀

昭和四十五年作。前書に「木曾八句」とある。

木曾馬は強健で寒さに強く、かつては冬でも山間の地での農耕や荷駄の運搬を担っていた。

平明な句である。作者の視点は馬の齒にある。人と同様に、馬も老いは齒の衰えに現れる。齒の衰えとは、身体の衰えのことでもある。

上五の「馬もまた」の「も」に馬だけではなく、人の老いが一体となって投影されている。

冬。雪は木曾の山中に、音もなくしんと降りつづく。極寒の中で黙々と働く、農夫と老馬の白い息づかいまでが見えてくるようだ。

と同時に、次の春に向かい雪に埋もれた馬小屋でひっそりと時を過ごす、老馬のようにも思えてくる。

下五の「雪へ雪」の措辞が、この上五中七のフレーズを包み込むような余韻のあるものになっている。雪はいつまでも止むことなく、静かに積もっていく。

人の暮しと自然の厳しさ。音のない静けさが、なお一層、読み手の心に沁みてくるのだ。(大木満里)

第二句集 『秋收冬蔵』

新年の句。季語は「初笑」。

長年来の友人どうしが集まって、思い出話に花が咲いているのであろう。そこで誰かの言った「あの時は大変だったよね。実はね〜」との言葉に、今まで明かされていなかった過去の事実を知る。過去の時点ではとても重大な事件だったのかもしれないが、ここで「五十年」という歳月が効いてくる。「なあ〜んだ、そうだったの?!」と、今では笑い話。

新年の俳句は、ともすると儀礼的、観念的なものになりがちであるが、この句ではしっかりと情景が浮かんでくる。

角川書店の「俳句大歳時記」で「初笑」の項の近年の例句を見ると「初笑ひ米粒程の齒がふたつ(菊地恵輔)」、「久々におとがひ解きし初笑(青村萌生)」などが主眼の句が多いが、この句では「五十年」という歳月が重みを持っている。しかし重すぎることではなく、新年の華やいだ雰囲気一句を支配しているのである。(打木歩人)

「都市」二〇二六年二月号

魚目の一句・主宰の一句

日々に水に映りていろのきたる柿

魚目

六年ほど前になるが、現代俳句勉強会で宇佐美魚目の「秋收冬蔵」が取り上げられた。その時中西主宰から魚目先生は「見えないところを詠む」と教えられ、感銘をうけた。

芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」も「見えないところを詠んだもの」で推敲の後に生れたものである。魚目のそれも同様に写生から摺んだイメージを正確に伝えるために、現実の写生を超えた表現や言葉を見つけたことではないか。例えばホトトギスの先達である飯田蛇笏の「芋の露連山影を正しうす」の「影を正しうす」、中村草田男の「冬の水一枝の影も欺かず」の「影も欺かず」は写生を超えた表現であると思う。

掲句は句集「秋收冬蔵」の中の一句で、赤く実った柿を水を紹介して詠んだもので「赤々と水に映りて空の柿」と見たままとせず、過ぎ去った日々を水に映っていたと写生し、風雨のある長い月日を経て完成した柿を「いろのきたる」と詠んだことにより、見えなかった柿の一生が見えてくる。これも写生を超えた表現だと思ふ。

(高橋 巨)

第二句集 『秋收冬蔵』

海老揚ぐる油の湯気や花の雨

夕紀

掲句の「花の雨」の日は蕎麦屋に引き寄せられるような少し肌寒の日だったのでしよう。客席から調理場が見える小さな蕎麦屋。海老を揚げるときのジューツという音が聞こえやがて油の香りも漂ってきます。見ると料理人の手元に油の湯気が瞬時に立ち上がる様子が見えます。一気に視覚、聴覚、臭覚をくすぐられ美味しさへの期待が一層高まります。

稲畑汀子の「咲き満ちて散るほかはなし花の雨」の句は、華やかに咲き誇っている桜もいずれ「花の雨」に寂しく散る定め of 儂さを匂わせています。

一方、掲句は人の楽しい営みと調和する「花の雨」。蕎麦屋の外に見える桜は直に散りますが季節はやがて新緑の初夏へと移ります。変わりゆく季節を下五に愉しみ、上五中七に蕎麦を食す楽しみを瞬間的に捉え、それは生きる強さや逞しさを漂わせています。

時の移り変わりに動揺すること無しに蕎麦を楽しむ力強さ、さらに「花の雨」に情緒豊かな風情を、日本独自の美しい取り合わせの句として鑑賞しました。

(丹野 遊)

「都市」二〇二五年六月号

魚目の一句・主宰の一句

雨あとの水に立ちつつ咲く薺

魚目

とても平明な句です。実景に対して何の要素も表現上の計らひも加えず、ささやかな発見がそのまま句になったように感じます。薺と言うと芭蕉の「よく見れば薺花咲く垣根かな」を思い出しますが、いずれも新鮮な感動が素直な言葉の運びのなかに表現されています。それぞれが芭蕉、魚目の傑作というべき句ではないかもしれませんが、機智的な生活詠などに比べてはるかに純粹な詩情を有していると感じます。

魚目の句は、風景句であっても単なる写像ではない魚目独自の美意識の世界の中に詠まれ、難解と感ずることがあります。この魚目独自の美意識を、夏石番矢は、他人に解釈できない個人的な思い入れによる偽の世界、自然として批判的に捉えています。

ただ、掲句のような平明な句に触れると魚目の句の基には、確かに実の自然があり、生への慈しみがあり、そこに魚目の矜持とも言える一句を成すうえでの激しいやり取りの跡をすべて消し去る美意識が水のように静かに行き渡っているのだと感じます。

(北杜 青)

第二句集 『秋收冬感』

店先の糞受け箱や燕の巢

夕紀

毎年のように南の国から燕がやって来ると、そろそろ夏だなどの感じを受ける。燕は日本に来てからパートナーを求めるのか、ペアでやって来るのかはよく判らないが、いずれにしても到着するやいなやあちらこちらと巣作りの場所を求めて飛び廻る。

燕は大敵の鴉から巣を守るため人間の生活する建物や巣の場所とし、番でせつせと土を運び左官作業よろしく見事な巣を作る。巣作りが済めば次は産卵となり卵を抱き温めるうちに可愛らしい雛が何羽か誕生する。

雛は親鳥から餌を貰い成長するわけだがその糞は当然に巣の外へ、巣の場所を提供した者にとっては厄介な事になる。やむなく糞を受ける容器を取り付け巢立までやさしく見守ることにする。

主宰は街のどこかの商店の店先に燕の巣を見たのだろう。その店では客の迷惑にならぬように巢の下に箱を取り付けることで燕の子へも買物客へも気遣いをするやさしい店主、店先の糞受け箱と表現すること、その情景と共に店主の心意気を表した句ではないかと思つた。

(芦澤 湧字)

「都市」二〇二五年六月号

東大寺湯屋の空ゆく落花かな

魚目

この一句の持つ魅力、それは何よりも、この句が「余白」を持つことによるのではないだろうか。おおらかでのびやかで、空の青さがそのまま、永遠の興行きを持つている。

それにしても句の「余白」とは何だろう。それは決して「無」ではない。「白」と言う字が使われていても、「白」でもなく、ましてや「純白」であつては、なおさらいけない。

例えば、「東大寺」の言葉の重みから実感される風姿、「湯屋」の言葉の柔らかさから想像される湿り気、「落花かな」の余韻に感じる梵鐘の響きのような波動、それらの香気は、言葉の「滲み」が生み出す効果であつて、それはまさに一句の「余白」が有つてこそそのものである。

俳句の十七文字の制約は、一語一語の言葉に無駄のない緊張を求められるように思えて、その実は、一語一語の関わりに適度の「余白」を持たせることにある。魚目俳句の神髄は、この「余白」と、そこに生まれる「滲み」の、銜いれない技巧にあるのだと、ほとほと感心させられるのである。

(本多 燐)
第二句集 『秋收冬蔵』

呼ぶ声に目の覚めたれば春の鳥

夕紀

美しい春の朝を詠んだ一句である。まどろみの中で作者を呼ぶ声——目が覚めてみれば、それは鳥のさえずりであった。無意識下に聞こえてきた呼ぶ声で次第に覚醒し、作者は目を覚ます。その呼ぶ声とは鳥の声なのだろうか。そうではないのか。現実の声なのか、それとも夢の中の声なのだろうか。

その声は作者を起こそうとする御主人の声かもしれない。そう考えると、甘やかな幸せな朝の様子が目に浮かんでくる。あるいは、夢枕に立った亡きご両親の声だったのかもしれない。その優しい声に幼かった子供の頃に戻ったのかもしれない。いや、もしかすると、師である湘子先生や魚目先生の声だったのではないだろうか。想像は限りなく広がっていく。

まどろみから覚める前のほんの一瞬を詠みながら、興行きを感じさせる永遠の一瞬を描いている。そして、読み手にも浮遊感を伴う目覚めの瞬間を追体験させてくれる。「春の鳥」は明るい光の差す方へと導いている。簡潔な言葉でありながら深みを宿す、詩情豊かな一句である。

(岩崎 曜)
「俳句四季」二〇二五年六月号

魚目の一句・主宰の一句

うらうらと海上三里接木かな

魚目

晩春のころになると天地に陽光があふれ気温も上がり接木・取木・挿木などを行うのにつき易く絶好の季節となつてくる。

魚目の句は渥美半島の海辺の高台などで蜜柑や柿の台木に近縁の植物を接木している景だろう。そこから見える海の色は藍色に、海上三里と言えば水平線まで風で、遠くまで見渡される大景である。そこに（接木）と言う小景な季語を配して大景と小景を對比させた印象的な句になつていると思う。また（海上三里）と（接木）には手心や春が来て海の色が緑を増し生物を育む生命観の生き生きとした力を感じる。

ここで、ふと蕪村の句へ春の海ひねもすのたりのたりかなの句が浮かんだ。句意は違うが（うらうらと）の措辞が春ののんびりとした暖かさ、（ひねもすのたりのたり）は春の暖かい倦怠感を、また（海上三里）と（のたりのたり）が（海の広さ）と（時間の経過）の対比を感じる。蕪村の句は春の海の雄大さと時の過ぎ行くまを詠み、句意は全く違うがリズムは良く似ている。どちらも海と春へのオマージュの句ではないだろうか。

（中島 晴生）

第二句集 『秋收冬感』

新巻の利かん気の顔買ひにけり

夕紀

小さい頃年末になると実家の台所に鮭が吊り下げられた。「塩引き」が来るとお正月を実感したものだ。大晦日に半身が下ろされ、焼いたり、雑煮に入れたりして、最後は骨ごと昆布巻きにして食べた。

長い間、新巻鮭はあの塩引き鮭だと思っていたが製法は異なり味わいも少し違うようだ。

掲句は新巻鮭。師走の活気あふれる市場、主宰もちよつとわくわくしながらずらりと並んだ新巻鮭を前にどれにしようか眺めておられる。そして主宰が選んだものは利かん気の顔である。胴体でなく顔で選ぶ、なんとも主宰のちよつとユーモラスな一面が感じられる楽しい句だ。利かん気の顔の鮭はきつと数々の修羅場をくぐり抜け身も締まって美味しさに違いない。主宰はあの大きな新巻鮭を持ち帰られたのであろうか。それともどなたかに贈られたのかもされない。

ほかほかのご飯と焼いた塩鮭を前に主宰の嬉しそうな顔が想像できる楽しい一句だ。

（長岡 あゆ）

「都市」二〇二四年四月号

魚目の一句・主宰の一句

翔ぶものに空やはらかし餘花の村

魚目

魚目は終戦除隊後、父の野生のすすめで俳句の道に入った。橋本鶏二、高浜虚子、野見山朱鳥他出会った俳人は枚挙に遑なく恵まれた俳句人生を送っていた。結婚の媒酌は虚子である。

昭和三十四年十二月三十三歳で第一句集『崖』を刊行の後の数年間、燃え尽き症候群に陥る。四月に虚子が逝き、次第に投句数が減って行ったと言われている。魚目の関心は画に傾き特に香月泰男に心酔し画を収集している。数年の後魚目は少しづつ復調し第二句集『秋收冬蔵』を昭和五十年に刊行する。

『崖』以降の昭和四十九年までが収められ年を経るごとに句数が増え順調である。

掲句は昭和四十七年の作品である。

翔ぶものとはなんだろう。鳥か舞う花片か魚目の心か、大らかな句だ。何事もゆったりと懐深く受け止めてくれる大空、やはらかしの措辞が心を打つ。

前年他界した画家香月泰男、父野生への追悼の句も見られ復活の魚目が息づいている。二人への悼句。

死を知らずよべ望月を梅の中

香月へ

朴落葉百を火として歎くのみ

父野生へ

(岩原真咲)

第二句集 『秋收冬蔵』

遠花火外つ国へ来し身軽なり

夕紀

遠くに花火の音が聞こえ、いつか見た絢爛たる大花火が蘇る。そう、ここは外つ国。それにしてもこの身軽さは何だろう。懐かしい故郷の風景、心通う家族や友人、馴染んだ慣習や伝統。そうした一切をひと時離れ、全てが新しく刺激に満ちた地に今身を置いている。私は自由。何だってできる。

身軽さとはfreedom。掲句を鑑賞しつつ、私は失った身軽さを取戻そうともがいた自身の半生を思う。分断された祖国。自分は何をすべきか自問して突っ走り、袋小路に迷い込んだ。国から拒まれ続けた旅券を手にしたのは四十代の半ば。私は東京を発ち、下関から釜山へ渡った。その昔、関釜連絡船と呼ばれた船で玄界灘を越えた父母の道を逆にたどり。無人の甲板で涙を流し、チョ・ヨンピルが流れるバーで少し酔う。翌朝釜山港の埠頭に降り立ったあの身軽さを忘れない。私は自由。何だってできる。

その夜、ホテルの窓から見下ろす街路は煌々と灯り、乱雑な活力を発散する人々が夜更けまで行き交っていた。それから三十数年が過ぎ、主宰の掲句に出会った私はまた少し身軽になりました。

(金 いがん)

第一句集 『都市』

木をはなれ木につく雪や如意輪寺

魚目

如意輪寺と言えば吉野が有名である。そして吉野は桜と連想するのが一般的だがこの句は雪の景色である。魚目が昭和四十六年吟行した時の句である。

吉野は奈良の南東部山深い所にあるのでこの年は雪の景色となったのであろう。「木をはなれ木につく雪」と詠んだところが面白い。普通絵に描く雪景色となれば木に付いているところを想像する。ところがこの句の景色は雪が木を離れて、くっ付いていると表現している。しかしどこかは木に付いているところもあるのだ。奥深い山の気象だからこのような現象が現れたのだ。これは俳句だからできる表現の面白さである。魚目の俳句は虚子の「ホトトギス」から出発しているから細かい写生眼を持っている。

如意輪寺は後醍醐天皇や楠正行など南朝ゆかりの寺だ。魚目はどのような思いでこの寺を取り合わせしたのだろうか。勝手な鑑賞をして想像するのが俳句の楽しみだ。この句は太平記にある離合集散の南北朝の歴史小説を想像させる面白さがある。同じ時に「杉戸の繪雪にあかるし目鼻失せ」の一句もある。もう一度吉野へ行ってみたい。

(安藤風林)

第二句集『秋収冬蔵』

外に刻むキャベツわんさと祭来る

夕紀

あの日、それは暑かったのです。都市の会の吟行で雑司ヶ谷の鬼子母神に来ていた私たちは、神社の夏市に遭遇しました。恒例の朝顔の市はもちろん、様々な屋台が立ち並び、浴衣姿の子どもたちが走り回り、狐のお面が売られ、猿回しの猿がふてくされたりして、雑多な色や形や音や匂いが入り混じって、まるで非日常的な世界に迷い込んだようでした。

その時主宰は「こういう時はなんだか屋台の物が食べたくなるのよね。」と言ってお好み焼きを注文されました。屋台の店主は汗だくで鉄板の上をかき混ぜて威勢よく作っていました。それを、先生と遊さんと私は石段に座って「熱！」と頬張りました。

確かに、屋台横にはキャベツの段ボールが積まれていて刻みキャベツも山盛りになっていたはずですが改めて主宰の句を読むと、切り取られた情景と祭りの喧騒と高揚感がありありと蘇ってきます。

一緒に暑さにあえぎながら座っていたのに、さらにと光る利那を見事に掬い上げる主宰の創作の秘密を、少しだけ垣間見たような気がいたします。

(角田 球)

都市一〇一号「幽霊画」

魚目の一句・主宰の一句

夏柳風に吹き割れ古人見ゆ

魚目

前書の「芭蕉の書簡」は魚目の父野生が入手した。書道塾を職とした魚目のこの書簡に対する真贋の調査研究はノート一冊を成す程だったという。昭和四十二年八月朝日新聞に「新発見の芭蕉書簡 蕉風確立期の貴重な資料に」と、写真と共に掲載された。掲句の初出は「青」昭和四十二年六月号。「夏柳」十三句のその中に、「芭蕉の書簡三句」の前書で次の二句の間に書かれている。

今や露命頼むばかり雲と汗の旅

瀬の中の魚も見通す汗の胸

青々と枝垂れて繁茂し少しの風にも大きく揺らぐ夏の柳。魚目はその風の柳の奥に芭蕉を見たのだ。「医学的には不健康な症状かも知れませんがこのごろ（中略）こんもりと茂った夏木の葉影の中に全く不意打ちに松尾芭蕉の顔が見えたりして心の傾斜をおそろしく思ったりします。（以下略）」（朝日新聞昭和四十二年六月）と、魚目は書いている。

『芭蕉さん、ありがとうございます。真蹟でしたね。』と、葉陰の奥へ声を掛けたかも知れぬ魚目。自身でもおそろしくなる程、芭蕉に傾倒した魚目のことをもともとと知りたく思った一句である。（星野佐紀）

秋の昼夢見る父の手が語り

夕紀

「父入院」と前書きがある。

ベッドの上でうつらうつらしているお父様の手が意味あり気である。何かを指しているのか、探しているのか或いは生まれた時の様にしっかりと握っているのか、目や口でなく「手が語る」という措辞がいい。一般に父と娘は仲がいいと言われているが、最後に愛娘に口が効かなかった代りに指で言葉を宙に書いている様にも見える。その手に聞いてみたい。

病雁のひとつに父も数へむか

父危篤

雁や砥を磨くごとき父の息

この足袋を穿かさば父もお別れか

マスクしてひたすら歩く一日かな

露店にてとんび開けば父似し香

踏みし根に励まされたる枯野かな

終始娘の背中を優しく押して下さったであろうお父様を手厚く見送り、その深い悲しみを芸術的な俳句に昇華された心に眼裏に深く焼き付けておられる。主宰の心の奥に秘めている宝物を一つ垣間見えてしまった様な気がする。

（竹生田 棗）

第三句集『朝涼』

良寛の天といふ字や蕨出づ

魚目

良寛の天の字は、かの有名な「天上大風」。子供達から「風を作るから字を書いておくれ」とせがまれて書いたとされている。昨年の秋の一泊吟行で我々は出雲崎の良寛記念館を訪れ、良寛の多数の遺墨を拝見する機会を得た。中国の書聖といえは王羲之。日本の書聖は空海（弘法大師）と言われてきたが最近では良寛を加えて日本書道史の二大山脈とする説が定着している。良寛の書の魅力は純な精神と品格の高さが作品にあふれていることであろう。

そして魚目は自宅で書道塾を開いていた書家である。書家の魚目が膨大な良寛遺墨の中からこの「天」という一字を選んだことに息をのむ。

天上は天空、大空、宇宙。大風は仏の大きな慈悲の心。この世には仏様の慈悲の心が満ちているの意。天の第一画は墨がドボンと滲んでいる。ここで良寛はしばらく筆を止めて十分充電してから、やおら筆を進めている。春先、日当たりの良い山野から萌え出る蕨のように。書はそれを書いた人をはっきり映し出すとよく言われるが、これを書いた良寛と、この字を選んだ魚目の中でいつか重なって来る。

(桜木 七海)

第二句集『秋收冬蔵』

湖明けて白鳥の声隙間なし

夕紀

昨年十一月、結社の一泊吟行で、白鳥の渡来で有名な新潟の瓢湖に行った時の句。日が明けて、これから飛び立とうとする四、五千羽の白鳥が湖一杯に群がり大きな声で鳴き騒いでいる光景を詠んだもの。

何といってもこの句の肝は「隙間なし」という下五である。白鳥の声は当然ながら聴覚で感ずるものであるが、掲句はこれを「隙間なし」と視覚的に表現した。その結果、無数の白鳥が大きな声で群れあっている様子だけでなく湖が広いということまで想像させることに成功している。

私もこの吟行に参加し、何とかこの景を詠むべく呻吟したが、どうしても聴覚的な表現から抜け出せず満足できる句はできなかった。

この句を見て、ある感覚を他の別の五感で表現する妙味を教えていただいた気がする。

主宰の句集『くれなゐ』に

歳月の手触りなりし毛糸帽

という句があるが、この句も、過ぎた歳月の寂寥感を毛糸帽の手触りという触覚で表現しており味わい深い。

(嶋田 正次)

「都市」二〇二四年二月号「白鳥」

美しきものに火種と蝶の息

魚目

俳句に興味をもちだして、間もない頃のことだと思えます。まだ俳句のことをあまり知らないのに、本屋に並んでいる句集を手に取り、どうしたことか、句集を買ってしまったのです。もちろん、句集の作者宇佐美魚目の事も、どんな人かも知らなかったのですが、ばらばら捲っているうちに、買ってしまっただけです。

奥付をみると初版第一刷が平成八年三月とあり価格は二千七百円、決して安い買い物ではなかったと思えます。今から二十八、九年前のことです。

句集の名は「薪水」。あとがきに第六句集とあり、「薪水」は火と水というほどの意と書いてあります。

その「薪水」に蝶の句がありました。その頃、蝶の卵を採取して、卵から、蛹に、食草を毎朝とってきて、蛹に与え、蛹が脱皮して蝶になるまで育てていました。蝶は、脱皮して翅が乾いたら、すぐに囲いから空に放ちます。蝶の命は短い、脱皮して翅を広げたら、すぐ空に戻さねばなりません。蝶は頭上を一周すると遙か彼方にとんで行ってしまいました。美しい蝶の脱皮を見ていると、蝶の吐息が聞こえる、そんな気がするのです。

(城中 良)

第十六句集『薪水』

水仙の葉を結へつつ春惜しむ

夕紀

水仙はヒガンバナ科の多年草であり、地中海沿岸原産で古く、シルクロードを通して東アジアに渡来し、日本の暖地にも自生化しました。

咲き誇っている水仙は、清楚で微かな香りも流していますが、枯れると細い葉は二つに折れて垂れ下がってしまいます。

主宰のかつての庭にもピンと立っていた水仙は、さぞかし気持ち爽やかにさせていた事でしょう。

起こり得たことの喜怒哀楽、そして再び帰り来ぬ事の思いを、去りゆく春に託しながら、数本ずつ結わえられた時間は恐らくやさしい時間であつたに違いありません。

役目を終えた水仙を、花を支えた葉を結わえながら来年も咲く事を願っていられたのでしょうか。

この句を拝読した時、「葉を結へつつ」の言葉に込められた気持ちの優しさに、私は嬉しさを思いました。

厳しい冬に庭を彩った水仙は役目を終え、春の花へと譲っていくでしょう。

(甲光あや)

角川『俳句』七月号

魚目の一句・主宰の一句

秋水を魚落ちゆけり人の息

魚目

山巖を白狼走る吹雪かな

夕紀

この句は句集最初の、多分前衛俳句の影響が残った二句（自動車解体こぼろぎ産卵管を地へ）や（馬頭すでに物体波うつ塀の雪）に挟まれている。何故、掲句は下五に「人の息」が思い浮かんだのか。似たような構成の句は句集後半に見られる。

古池にいまを浮く亀更衣

瓜食めば晝ありありと天の川

熱湯は連珠のごとし山霞む

「追悼 宇佐美魚目」〔俳壇〕二〇一九年二月号）の中村雅樹によれば、吟行の個々の景を「永遠の景」が現れるように詠むこと、具象と抽象の稜線を詠むように言われたという。まさに芭蕉の「虚実の世界」である。またわが師、中西夕紀によれば、魚目の「句想は現場以外の古文書、歴史書、経文、小説、詩歌、絵画等の色々のところから得ていた」という。即ち、何故下五がこの措辞なのかという問い自体がナンセンスなのである。ある時は、俳句という詩形に「汚れてはいけない」と諭されたという。私には「俳句に甘えるな」と鞭うたれたように感じる。もって姿勢を正すべし。

（森 有也）

第二句集『秋取冬蔵』

実は私は狼が嫌いではない。「好き」という部分が少しあるのかも知れない。小さい時にジャック・ロンドンの「白い牙」を読み、大きくなつてからも何度か映画を見た。過酷な環境で育てられ、狡猾さと強靱さを備えた狼が人間の優しさに触れて忠義と愛情に芽生えて、命がけて飼い主を守る存在になるという物語は私に感動を与えた。狼は危険だという負のイメージが私の中で閉ざされた。

白い狼は滅多にいない。それ故土地によっては神聖な物として崇められることがある。孤高で賢く、人の本質を見抜くような眼をしている。

掲句の白狼は実際にはいない。激しい吹雪が山を下る様をまるで白い狼が走っているようだと捉えているのだ。吹雪の厳しさの前では人は為すべきことを知らない。自然は人間が制御出来るものではない。人間の力の及ばない超自然がそれを司る。それを神聖化されることもある白狼と捉えたのだ。この句では又「白」が意味を持つ。白い狼、白い吹雪。白の持つ高潔なイメージがこの句のある種の神々しさに導く。私はこの句に白狼をすっかり見た。

（茂呂詩江奈）

第四句集『くれなる』

魚目の一句・主宰の一句

東大寺湯屋の空ゆく落花かな

魚目

夕映の窪みに村や春の富士

夕紀

昭和五十五年刊行の第三句集『天地存問』所収。第二句集『秋収冬蔵』を学んだ際に、少数の人と深く付き合ひ、山村での自炊生活の日々のあることを知り、「隠者」という言葉を連想したものである。更に十八歳で母を失った魚目の心底には、死や命という文字が潜んでいるのでは？と感じたことを思い出す。「見えるものから見えない世界を詠む」と言う魚目である。そうであるならば、空をゆく落花に何を見たのであろうか？

大仏殿から少し奥まった所に佇む大湯屋。その空をゆく落花。「ゆく」から落花自らがこの空を選んだように思え、俗から離れたところに心を置く魚目と重なる。掲句は五十一年の作であるが、四十九年十二月に父野生が亡くなっている。俳句の道を開き、書道教室のための家を用意した父である。壮年となつた魚目は如何なる感慨を抱いたのであろうか？散りゆく花に故人を重ねるのは短絡的ではあるが、落花に父や母を観、心を許した師や友と愉快に対話する魚目を想う一句である。

(三森 梢)

参考資料 『俳人宇佐美魚目』(中村雅樹著)

『宇佐美魚目の百句』(武藤紀子著)

掲句は、自然の美しさと日本の風土を巧みに捉えていると思う。「夕映」と「春の富士」という二つの美しいものが、「窪みに村」という一つの小さなものによつて結びつけられている。

「夕映」という言葉からは、夕日に映える美しい光景が思い浮かび、「窪みの村」からは、そこにある村の存在が平和で穏やかな生活を連想させる。また、「春の富士」は、季節の移ろいの中で変わらぬ美しさを保つ富士山を象徴しており、日本人にとつての心のふるさととも言える存在である。掲句は、自然と人間の調和や季節の移ろいを感じさせる情景を描き出し、写生を超えた俳句の奥深さを感じさせる作品である。この句が持つ静謐な美しさと、そこに込められた深い観察力と感性は中西俳句の真骨頂といえるものだ。俳句という短い形式の中で、豊かな情景を想起させる言葉の選び方にも作者の直感の鋭さを感じさせる。主宰は、夕映えと春の富士という美しくも壮大な光景を、窪みに村という一つの小さなものによつて表現することで、日本の風景の新しい見方を提案しているのではないだろうか。(落合秀岳)

第四句集『くれなる』

湘子の一句・主宰の一句

顔上げて目鼻がまづし冬の暮

湘子

藤田湘子の第一句集『途上』の「自画像」の項の一句である。『途上』は編年体の句集ではほぼ経年通りになっている。この句は昭和二十六年の冬の句で、年譜（山地春眠子編）によれば、湘子は二十五歳で、この年「馬酔木」四月号第一回新樹賞を受賞している。掲句は戦後まもなく、まだ復興の波が起きない頃、生きることに一生懸命で、将来の希望も持てない頃のことを冬景色の中に詠んだものだろう。

湘子は小学六年生の時、「朝焼のこずゑに高き百舌鳥の声」を学校の文芸誌に発表している。十六歳の一月、池袋の下宿先より帰郷した際、小田原城址の堀端で満月を見て、その月の光に照らし出された早咲きの桜の蕾が詩心を誘い、その夜を「わが俳句の出発点」として回想している。その年、古書店で秋櫻子の『現代俳句論』と改造社の「俳句研究」を買い、秋櫻子の俳句論に興奮を覚えたとある。その感性和行動力は生涯続き、九頁におよぶ年譜にぎっしりと余すところなく伝えられている。

（高橋 巨）

第一句集『途上』より

日陰から見れば物見え一茶の忌

夕紀

私は、喫茶店の窓際に座って外を見るときもなく見るのが好きだ。室内から見ると外は明るく、自分が黒子になった気がする。私の存在は誰にも気付かれず、私の方からは物事がよく見える。

掲句は、言われてみればその通りという日常の発見をさりげなく示すようで、実は奥が深い。

この句から見えてくるものは一茶の境遇と一茶のまなざしである。

一茶の有名な句には、子どもや手を摺る蠅、やせ蛙、雀の子などが出てきて、身近で親しみやおかしみを感じる。一方では、父母との縁浅く、兄弟との長い争いがあり、妻子にも先立たれるなど、日陰の道の連続であった。

日陰があるからこそ、日常の物事がより輝いて見えたのではないのか。

一茶の忌と絶妙な関係を表す措辞ではあるが、決してべたつかないところが巧の技である。

（山本恵夢）

現代俳句文庫 『中西夕紀句集』より

幸を撒くごとく影置くはこべらに 湘子

掲句は昭和四十年、湘子三十九歳の時の作。この前年に雑誌「鷹」を発行、同四十三年二月には自らの俳句を採求していくと言う志のもと「馬酔木」同人を辞退して師と袂を分かち、「鷹」を主宰してゆくと言う多難な激動の時代背景の中に生まれた句と思われる。

さて、前の年に「鷹」を刊行し多忙な年明けて久しぶりに早春の野辺に出てみると、春の七草のひとつであるはこべらが、地に這って、まき散らされたごとく白い五弁の小さな花と、その確かな影を落としている。それを見て、多忙に追われる焦燥感や、いろいろな心の葛藤も癒されて幸福感で心が満たされ、はこべらに励まされたのではなからうか。

句集の（あとがき）に「この時期私は「鷹」の創刊「馬酔木」同人の辞退と言うことがあった、私は最近になってようやく、じぶんの俳句が書ける自信が持てるようになってきた。」とある。この第三句集『白面』は壮年期の高揚した湘子としては一誌を立てるターニングポイントとなった句集ではなかったろうか。

（中島晴生）

第三句集『白面』（昭和四十四年刊行）

いくたびも手紙は読まれ天の川 夕紀

掲句はとても奥深い句だと思う。作者は何も言っていない。ただ「手紙が何回も読まれた」と言っているだけ。あとは読者に勝手に想像させる。それは、読んだ人、一人一人の生きてきた道によって受け取り方が違ってくる。百人読めば百種類の受け取り方がある。そして季語が「天の川」。これも季語の力を信じて使われている。そして、どんな読み方をしても最後はこの「手紙」に癒されて力を貰い、また、大切に仕舞われるのだろうと想像させられる。読み手に全てを託し「句」が勝手に独り歩きするのだ。作者はそこまで読んでこの句を作ったのだろうか。

以前、私は先生の経歴を見て、「こんなに硬い学部卒業で、どうしてこんな句が出来るのだろうか？」と思った事がある。ものを考えその奥の奥から見つめる目があるのだろうか。「自分だけの見た風景、感じたこと。それを描くのです。」と言われる。

ちなみに、私はこの手紙は「主人からの初めてのラブレターかな、と思う。今でも、疲れた時などこの手紙に癒されているのかな、だから先生のあの笑顔があるのかな、などと勝手に想像するのである。」（林 わか）

第三句集『朝涼』